

Title	マルクスによるスミス批判の構造：『経済学・哲学草稿』でのスミスとマルクス
Sub Title	Marx's critical method of political economy in the manuscripts of 1844
Author	山辺, 知紀
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1976
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.69, No.6 (1976. 8) ,p.484(118)- 499(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19760801-0118
Abstract	
Notes	『国富論』刊行200年記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760801-0118">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19760801-0118</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# マルクスによるスミス批判の構造

—『経済学・哲学草稿』でのスミスとマルクス—

山 辺 知 紀

1

マルクスは、1844年2月の『独仏年誌』発行の後そこに載せられたエンゲルスの『国民経済学批判大綱』に刺激され、かれの初めての経済学研究に没頭したということはよく知られている。そしてそこでの研究成果は、現在『経済学ノート』及び『経済学・哲学草稿』（以下『経哲草稿』と略記す）として残されている。今、私が本稿において扱かおうとしているのは、この『経哲草稿』の第一草稿だけに限定されている。このように狭く対象を限定する理由は、私の関心が主に当時のマルクスによるスミス批判の構造というところに集約されてしまっていることにある。

当時のマルクスによるスミス批判は、ほぼこの『経哲草稿』の第一草稿に凝縮されている。『経済学ノート』でのスミスからの抜粋は、この第一草稿の中で新たにマルクスにより構成されて登場しているし、『経哲草稿』の中でも第一草稿以外でスミスからの抜粋が行なわれているのは、第三草稿で二ヶ所あるのみである。また第一草稿での記述と関連する記述が、第二草稿や第三草稿の中に見い出されるとしても、不用意にそれらを結びつけることは、これらの執筆時期の違いもあり慎しまねばならないという事情もある。だから私は、『経哲草稿』の第一草稿でのマルクスの記述に限定して、そこでのマルクスによるスミス批判の構造を検討していこうと思う。

私が、この当時のマルクスによるスミス批判という問題に関心をもつのは、マルクスの思想形成史をそれとして叙述するというところからきているのではない。そのような観点からするなら、単にスミスら古典経済学ばかりでなく、今までの定式に従うなら、ドイツ観念論やフランス社会主義を含めたヨリ重層的な研究が必要だろう。しかし私の関心は、こうしたマルクス像の全体的把握を目指す研究から見ると、遙かに狭小な領域に限定されている。すなわち私にとっての関心は、単に経済学と経済学批判とを、私達の現実の社会認識という課題の中でどのように設定するかということに限られている。

それ故、ここでの対象に限定して言うなら、スミスの経済学に対してマルクスがどのような方法

をもってかれの経済学批判の方向を確立していったかということ、マルクスの思想形成史としてではなく、いわば経済学批判の成立史として叙述していくことが目指されねばならない。だから私は、『経哲草稿』の第一草稿における「労賃」「資本の利潤」「地代」の三項の平行的記述を、経済学批判の方向で構成し、そこからマルクスの疎外論の捉えうる有効射程範囲をいわば外側から枠づけしていこうと思う。そしてこのことは、同時に、経済学批判という次元に限定するなら、マルクスの方法意識の確立ということの意味していると言えよう。

2

マルクスは、『経哲草稿』の第一草稿でいわゆる所得の三源泉についての叙述を、古典派からの数多くの抜粋と要約とによって行なっている。この三源泉についての平行的記述において、マルクスは「労賃」「資本の利潤」「地代」について、純粹には論理的に一貫しているとは言えないような、いわば跛行的な記述を行なっている。これはすでにラーピンによって指摘されたように、マルクスがこの三項の記述を、「資本の利潤」の項から書き始め、「地代」の項は少なくともこの「資本の利潤」項との対応によって平行的に書き始められたが、「労賃」の項はその始まりを少しずらした所から遅れて記述され始めたということにもよるのであろうが、同時に、これら三項が互いに入り混って展開され、ある場合には、他の項の展開での帰結を自己の展開の帰結とするような記述も行なわれているということにも、その理由をもっているのであろう。そしてこうしたことが、この三項目についてのマルクスの記述の全体的理解を困難にしているようにも思える。

しかしながら、マルクスがこの第一草稿を「資本の利潤」の項から書き始めたということ、そしてこの「資本の利潤」が、マルクスにとって他の二つの項の記述に対して、いわば主となるべき内容をもっていたと推測することは、必ずしも不当なことではなからう<sup>(2)</sup>。そしてこれは全く形式的な理由であるが、「資本の利潤」項のみが4節に分けられ、そのそれぞれに小見出しが付けられているということも、ある程度こうした推測を裏づけている。しかし、この三項の平行的記述の終わり方からは、決してそのようなことは単純には言えないように思える。すなわち、草稿ページ〈17〉以後は、他の二項が記述されるべき箇所をも占領して、全ページが「地代」項で埋められており、その中で、この平行的記述全体への結論とも思える叙述がなされるのである。だから私は、こうした三項にまたがったマルクスの記述を整理し、その上でそれらを構成していかなければならない。

注(1) Nikolaj I. Lapin, Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx, in: Deutsche Zeitschrift für Philosophie, Heft 2, 17 Jg. (このラーピン論文は、細見英氏により、『思想』No. 561 に邦訳が掲載されている。)

(2) Vgl. ibid., S. 204 (ラーピンはこれに先立つ考証により、マルクスが第一草稿を「資本の利潤」項から書き始めたことを論証し、そこから当時のマルクスが、資本の中にブルジョア社会のすべての問題を見ぬいていたと推定している。)

「資本の利潤」及び「地代」の両項の書き出しは、ともにセーからの引用によって始められるが、それに続けて両項とも、それぞれスミスによる資本及び地代に対する規定が要約的に語られる。資本について言うなら、資本は「貯蔵された労働」であり、「ものを買いとれる力」であり、「労働と労働生産物に対する支配権」であるという規定が、そして地代については、この量が「土地の豊かさ及びその位置に依存」し、地主階級は、それ故、「自己の収入をえるのに労働も配慮も必要ではない階級」だという規定が、それぞれスミスの中から引き出されてくる。そして更に資本の利潤については、「基金、すなわち資材とは土地と製造労働の生産物のあらゆる集積である。資財は、その所有者に収入あるいは利得をもたらす場合にだけ、資本と呼ばれ<sup>(3)</sup>」、この資本の利潤の量は「使用された価値により完全に規制される」ということが、同様にスミスからの引用により示される。これに対して労賃に対する記述は、他の二項より少し遅れて出発し、その規定としては「労働者という種族が死滅しないですむという線」が、労賃の最低水準として示されている。

しかしながら、ここでマルクスがこうしたスミスからの引用あるいは要約の構成を行なった意図が問われなければならない。ただ単に貧困な労働者に同情し富裕な資本家や怠惰な地主を批判するというのなら、スミスの言葉を用いなくとも、マルクス自身すでに『ライン新聞』等において行なっていたことであるし、更にまた、そうした事態をほかならぬスミスでさえもそのように言わざるをえないのだという、いわば説得のための効果として利用していると考えられるのも、逆にスミスの意味を不当に小さく評価することになるだろう。いわんや、スミス自身が、マルクスの目の前に存在する現実社会を否定的に構成する力をもっているとの前提で、これらの抜粋が行なわれているなどと考えるのも同様に誤りだろう。

マルクスが、労賃・利潤・地代についてのそれぞれの規定をスミスから抜粋してきたということは、あくまでもスミスによるこれらの構成そのものを問題にするための作業だと理解すべきだろう。たしかに、資本規定を個別にとり出しそれだけを読むなら、そこに疎外論への構想を読みとることは可能だろうし、地代規定における自然についても同様のことが言いうるかも知れない。しかしそうした読み方は、疎外論からの読み方であって、疎外論がその射程の中にどのような問題を収めているのかを検証する方法としては、不適格だと言うべきだろう。

マルクスは、スミスから労賃・利潤・地代について、それぞれの規定を抜粋してくるが、かれはこの時点でただちに、これらの規定により新たな現実社会の構成へと進むのでは決してない。ここでのマルクスの課題は、かれ自身による現実社会の構成のための方法を確認することだと言える。そのためにマルクスは、スミスによる構成の方法を問題とし、それへの批判的検討を加えるため、スミスによる労賃・利潤・地代の規定を抜粋しなければならなかった。

スミスにとって、現実社会の構成という課題は、商品即労働生産物という置き換えによって果さ

注(3) Marx Engels Werke, Ergänzungsband (1), S. 484, 『経済学・哲学草稿』(岩波文庫版), p. 40.

れていたが、このことはスミスが、資本家・労働者・地主の三つの階級の存在をかれの初期未開社会なる概念と無媒介的に結合することを意味していた。だからマルクスは、ここにおいてスミスのいわゆる所得の三源泉、というより商品の三つの構成要素に対し、スミスによるこれらの構成要素としての規定を抜粋することから始め、それらの構成の質を問うことを意図したのである。

そして具体的に、資本利潤の規定においては、利潤をもたらす資材のみを資本と規定し、それ故「利潤あるいは利得は、労賃とまったく異なったもの」とスミスが規定することの中に、マルクスは、理想的関係としての社会を構成する方向と現実的なものの、そのものとしての自己主張の方向との矛盾を見ていたのであり、地代規定においても、「地代を土地の豊かさの大小に還元し」、そのことによって現実の社会関係の中で存在している地主・土地所有者への規定を、自然的規定として転倒させ、かつそれを構成するということが問われていたのである。もっとも地代規定については、スミスがこれをいまだフィジオクラートの的にしか捉えていなかったという限界があったため、そこでの自然的規定は、資本規定における理想的関係としての社会からの規定とは異なる規定になっていたにもかかわらず、この段階ではマルクスにとってその相違は明確には自覚されぬまま、ただちに現実の国民経済学的関係の中でその展開が試みられる。しかし草稿ページ〈7〉での中間総括以後は、次第にその相違がマルクスにとって自覚され、草稿ページ〈17〉以後は、後に述べることではあるが、国民経済学的関係としての地代規定が自覚的に展開されることになる。

マルクスは、労賃・利潤・地代というこれら三項が、スミスの中でどのように商品へと構成されているかを、これら三項についてのスミスのいわば無媒介的な叙述を抽出することにより果そうとしていた。スミスの語る個々の規定における叙述は、すでに見た如く、確かに現実的な言葉であり、それらは個別的に読まれるかぎり、たとえ地代項でのフィジオクラートの質は除くとしても、現実の私有財産の語る言葉でありえた。にもかかわらず、マルクスにとっては、これらはすでに現実的科学としての意味を喪失したものとしか映らないということ、ここにこれら三項の構成方法へのマルクスの問いかけの意味を読むことが必要だろう。だからマルクスは、個別的には現実的であるにもかかわらず、総体としては非現実的であるこのいわゆる所得の三源泉的な把握の基盤を、これら三項のそこでのスミスによる規定の質の相違を明らかにすることにより、批判したのである。このことは、いわば事実としての私有財産を関係としての私有財産へと、反省的に捉えなおす作業だと言うことができる。

スミスにとって批判されねばならないのは、事実としての私有財産から出発するにもかかわらず、これらを私有財産の関係として対自化するのではなく、理想的なるものとしての社会関係の中で、これらを構成するということにあった。そしてスミスは、この理想的なるものとしての社会関係すなわち類的关系としての市民社会において、これを調和的に描こうとしたのである。マルクスが、スミスによる地主の利害と社会の利害の一致、社会の富が増大し社会が進歩しつつある状態での資

本家と社会全体との調和、更にまた同じ状態での労働者の有利な状態等の主張について、それを批判していくのも、上の如きスミスの構成方法へのマルクスの批判の文脈において理解されねばならない。

さてマルクスは、このようにスミスにおける労賃・利潤・地代の構成方法を批判してきたが、このことは同時に、これらを私有財産の關係へと還元することを意味していた。だからマルクスは、具体的には「資本の利潤」項と「労賃」項との区別を資本と賃労働との対立關係として描きだすことにより、そこから国民経済学的關係すなわち私有財産の關係を抽出し、これらの区別を、たとえば形式的には平行的記述がつづけられるものの、實質的には取り払ってしまう。そしてほかならぬ「既成の世界秩序の事実上の解体である」労働者の立場から、すなわち「労賃」項において、草稿ページ〈1～6〉全体の間中総括がなされるのである。

もっとも、この中間総括に至るマルクスの記述の中で「資本の利潤」「労賃」の二項は、上に述べられてきた観点から見ると一応の展開はなされていると考えられるが、「地代」項については、まだ不十分な展開しかなされていないということは否定できない。しかし、そうした限界はあるにしても、マルクスの叙述に従って、今まで私が述べてきたことを検証するためにも、その中間総括部へと進まねばならない。

マルクスは、この中間総括において、スミス等国民経済学の矛盾を以下のように提示してみせる。一つの例を挙げて見てみよう。「国民経済学はわれわれに言う、起源からみても概念の上からみても、労働の全生産物は労働者に属するものだ。しかし同時に国民経済学者はわれわれにいう、現実においては、労働者の手に入るのは生産物のうちの最小部分、まったく必要不可欠の部分だけなのだ、と。」<sup>(4)</sup>(強調、引用者) スミス等国民経済学派の中にある矛盾を、このように抽出するというこの意味は、今まで述べられてきたことと関連している。確かにスミスにおいては、概念の上からみるなら、「労働の全生産物は労働者に属するものであり」、「すべてのものは労働によって買われるのであり、資本は集積された労働であり」、「労働こそは、人間がそれを通じて自然生産物の価値を増大させる唯一のものであり、労働こそ人間の活動的な財産」であり、「分業は労働の生産力をたかめ、社会の富と洗練度をたかめる」ものであるとされている。<sup>(5)</sup>にもかかわらず、このスミス等国民経済学者が、「現実においては、労働者の手にはいるのは生産物のうちの最小部分、まったく必要不可欠の部分だけ」であり、「労働者はすべてのものを買うことができるどころか、自分自身および自分の人間性を売らなければならない」ものであり、「地主と資本家は、地主と資本家という資格のおかげで、まったく特権的で怠惰な神々なのであり、いかなる場合でも労働者に優越しており、労働者に法律を押しつけ」、更に先には、労働の生産力を高め、社会の富と洗練度を高めたと

注(4) *ibid.*, S. 475, p. 25.

(5) *Vgl. ibid.*, SS. 475—476, pp. 25—26.

されたその分業が、「労働者を機械にまで落ちぶれさす」等々<sup>(6)</sup>といった事態を、黙認あるいは積極的に肯定さえするという。マルクスが問題とするのは、こうした矛盾が何故生じるかということである。

労働を人間の活動的財産とし、その労働の上に現実社会を叙述・構成してみせたスミスが、何故この同じ労働の現実に存在する否定的状況を自分の構成した社会への否定として捉ええないのか。この問へのマルクスの答は、簡潔かつ明確である。すなわち「労働そのものは、現在の諸条件のもとでのみならず、一般に労働の目的が富のたんなる増大であるかぎりでは、私はあえていうが、労働そのものは有害であり、破滅的<sup>(7)</sup>である。」ここにおいてマルクスは、労働一般と私的所有という特殊歴史的状況下における労働、すなわち賃労働とをはっきりと区別する。スミスにあっては、初期未開社会という抽象的モデルを設定し、そこにおいては労働一般を構成さるべき社会の基盤に置き、しかる後に、この初期未開社会を無媒介的に土地の私有と資材の蓄積により成立している現実社会に投影させ、その結果、現実の賃労働を抽象的な労働一般として表現しえたのである。だからこそスミスにあっては、いわゆる所得の三源泉たる利潤・労賃・地代の三者は、互いにこれら三つの項がそれぞれ自己の規定をそこから受けとる現実的關係を反省する契機を持ちえぬまま、ただ事実的にのみ統一されていたのである。そして商品という存在が、そこにおいて、それらを事実的に統一する存在であった。このようにスミスは、新たに登場した商品という社会秩序の要を、賃労働によってではなく労働一般によって構成し、それによって商品を媒介にして実現される市民社会を類の実現と見ることが可能になったのである。

マルクスはこの第一草稿を、スミスの規定に従い三つの欄に分けて書き始めたが、こうした記述方法があくまで便宜的方法であったことは、上のことから理解できる。マルクスは、「資本の利潤」及び「地代」項の冒頭でのスミスからのそれぞれの概念規定において、かれが現実的なもの、すなわち歴史的に特殊なる関係としてある地代及び利潤を、あたかも理念的な社会関係あるいは自然的関係として構成していることを批判していたが、少なくとも第一草稿のこの中間総括までの議論は、その批判を軸にして進められていたと言える。だから、それを進めるための具体的方法として「地代」と「資本の利潤」の二つの項での古典派的規定を、如何にして乗り越えることが可能かということが、ここでのマルクスの当面の課題であったと考えることができるだろう。そして「労賃」項の記述は、この課題を果すために用意されたところの、他の二項に対する否定的・反省的契機としての意味をもつものだと考え、だからこそこの項において中間総括がなされたのだとすることができるだろう。それ故、ここにおいてマルクスが、これら三項の平行的記述を行ってきたとはいえず、それは所詮便宜的方法であった<sup>(8)</sup>と言えることができる。しかし、先にも指摘した如く、「地代」項

注(6) Vgl. *ibid.*, SS. 475-476, pp. 25-26.

(7) *ibid.*, S. 476, p. 26.

(8) ラービンは、前掲論文でマルクスのこうした「対比的分析」方法について、これを *heuristische Methode* (発見的教

の記述は未だこの観点から見ても未完成であることは否定できない。この記述の完成は、土地所有そのものが資本の運動により近代的関係へと変質させられる過程の叙述を待たなければならない。

さてマルクスは、上述の如く、賃労働と労働一般を区別し、スミスにおける反省回路の喪失を、そこでのいわゆる所得の三源泉的把握の中に見い出した。だから次に果されねばならないものは、比喩的な言い方をすれば、スミス等古典派に代って、この反省回路を整備し、その上で古典派のカテゴリーを再検討する作業だと言うことができる。

3

マルクスは、草稿ページ〈7〉の中間総括の最後の部分で、それまでの国民経済学的展開とは区別される新たな問題を設定した。すなわち、「さてわれわれは、国民経済学の水準をこえることにしよう。そしてほとんど国民経済学者の言葉を用いて述べてきたこれまでの説明にもとづき、二つの問題に答えてみよう。(1)人類の大部分がこのように抽象的な労働へと還元されるということは、人類の発展において、どのような意味をもつか。(2)賃をひき上げて、それにより労働者階級の状態を改善しようとするか、さもなければ賃の平等を(ブルードンのように)社会革命の目的とみなすような社会改革家たちは、細かく立ちいってみれば、どのような誤りをおかしているのか<sup>(9)</sup>」という二つの新しい問題設定である。しかし、この問へのマルクス自身による解答は、直接的な形式としては見当らない<sup>(10)</sup>。だからまず、このマルクスによる新しい問題設定を、かれのそれ以前の叙述との関連において捉えなおし、しかる後にマルクスによる解答あるいは解答と看做されるものを、それ以後の叙述の中に捜してみる必要がある。

問題(1)についていうなら、これをマルクスによる新しい歴史構成の必要性への自覚として捉え、具体的には、スミスが言うところの「土地の私有」と「資材の蓄積」との関連において捉えることが必要だろう。すでに指摘した如く、マルクスは、スミスによる所得の三源泉的把握の中に古典派が現実的の科学としての反省契機を喪っている原因を見ていたが、このことは言い換えれば、スミスが初期未開社会を設定し、これによって労働を自己の原理としたにもかかわらず、その展開に際しては、「土地の私有」と「資材の蓄積」を無媒介的にいわば事実に導入し——スミス自身の中ではこの逆の関係が出発点にあって、それを上のように叙述したということではあるが——、それによって、いわゆる所得の三源泉的把握を導き出したことが批判されていたのだ。だからここにおいて

授法)と呼び(S. 202)、こうした分析方法によりマルクスが次第に労働の性格に目を向けることになったとしているが(SS. 211—212)、こうした理解には疑問が残る。

注(9) *ibid.*, S. 477, p. 28.

(10) ラーベンは、この二つの問題への解答を「疎外された労働」に見ているが、草稿ページ〈8〉以下のマルクスの叙述の整理方法に疑問がある。広松渉『青年マルクス論』にもこの問への解答の試みがなされている。紙数の関係もあり、断言的な言い方しかできないが、やはり草稿ページ〈8〉以下の捉え方に疑問が残る。



新たに提起された問題は、すなわち人類の大部分が抽象的労働へと還元されている状態を人類の発展史の中で、反省的に捉えなおすという新たな歴史構成を意味するこの問題(1)を、「土地の私有」と「資材の蓄積」との連関において捉えるということは、了解可能なことだと言わなければならない。そして事実、この問題設定後のマルクスの記述は、「労賃」部分の記述が抜粋集としては存続してはいくものの独立した内容をもたないものとなるのに対し、「資本の利潤」項は、「資本の蓄積と資本家間の競争」という前ページからの継続したテーマのもとに記述が進められ、また「地代」項の記述を見ても、ここでの展開は、中間総括以前では他の二項に比べてもっとも遅れていたという事情もあり、その前半では近代市民社会の内部での土地所有のもつ問題点への指摘が継続して語られるが、草稿ページ〈11〉の最終段落から後は、「資本の利潤」項での記述と関連して、大土地所有と小土地所有の間での競争へと論点が移行してゆき、草稿ページ〈17〉以後は、「資本の利潤」項での結論——この項は草稿ページ〈16〉で終わっている——と結合されて展開されていく。これらの記述の内容への検討は後にゆずるとしても、このように形式的にみても、上の推論は成立しうと思われる。

問題(2)について言うなら、これは第一草稿後半の「疎外された労働」との関連において読まれるものとも言える。勿論「疎外された労働」が、この問への直接の解答としての意味しかないなどということではできないが、少なくとも、資本と賃労働との対立を単なる事実としてではなく、私有財産の関係として概念的に捉え、そこから、その関係総体を止揚さるべき対象として構成せんとする「疎外された労働」の概念は、この問への解答の前提となるものであり、その意味において、この問は「疎外された労働」との関連において捉えることが可能だと考えられる。

さて、問題(2)については次節に譲るとして、問題(1)との関連において草稿ページ〈8〉以後の叙述について、その内容を検討しなければならない。

「資本の利潤」項について言うなら、これは先にも触れたように、草稿ページ〈5〉の後段から引きつづいて、「資本の蓄積と資本家間の競争」というテーマのもとに記述が進められる。そして草稿ページ〈10〉の終りまでが第一段落を、その後同じく〈16〉までが次の段落を形づくっている。そして第一段落ではスミスからの引用が中心となって、それにマルクスのコメントがつけられているが、第二段落では、シュルツ、ペクール、ビュレ等の引用がその殆どを占め、マルクスのコメントさえも数少なくなっている。マルクスの展開のこうした不十分さのため、これを内容的に構成するのは困難であり、どのように構成しても不十分さが残ることは否めないが、私は先に推論したような観点からこれらを構成していこうと思う。

まずマルクスは、スミスの言葉によりながら国民経済学的世界において、資本家間の競争というものが唯一、労働者や消費する大衆にとって有利に作用するという命題を取り出し、こうした命題が蓄積にこそその本質をもつ資本の運動から見るなら、競争と独占という単なる事実的対立に目

を奪われた謬見であることを、その競争と独占との同質性を次のように示すことにより批判する。「資本は一般に蓄積によってのみ成立するのであるから、多数の諸資本の成立はただ多面的な蓄積によってのみ可能であり、しかも多面的な蓄積は必然的に一面的蓄積に変化する。諸資本のあいだの競争は、諸資本のあいだでの蓄積を増大させる。蓄積、それは私有財産の支配のもとでは少数者の手中への資本の集中であり、一般に諸資本がその自然的な進行のままに放任される場合の必然的な帰結である。そして資本のこの自然的規定は、競争によってはじめて真に自由な進路を切りひらくのである。」<sup>(11)</sup>

未だ原蓄積過程についての後期の如き認識に到達していないマルクスにとって、資本の蓄積について、その成立を如何に描くかということは、ここにおいても問題として残されたままとも言える。そのため、「資本は一般に蓄積によってのみ成立する」と規定したり、あるいは「蓄積、それは私有財産の支配のもとでは少数者の手中への資本の集中である」と述べることによって、資本の成立から発展を位置づけようと試みてはいるが、しかしこれが不十分であることは認めなければならない。だからマルクスの叙述は、いきおい資本家間の競争を通しての資本の集中とその結果としての大資本の成立という点に焦点が合せられ、この大資本の成立という事態をもって国民経済学的な調和的世界の崩壊が語られる。

マルクスが資本家間の競争を叙述する際、スミスの固定資本と流動資本というカテゴリーを用いて大資本の優位性を指摘し、最終的に小資本と大資本とを次のように規定する時、かれが大資本の成立の中に歴史的に新しい質を見ていたと想像することができる。すなわちマルクスは、第一段落の終りの部分で、「最後に明らかなことは、産業労働が高度の段階に達し、したがってほとんどすべての手工労働が工場労働になっているところでは、小資本家にとって彼の全財産は、ただ必要な固定資本を手に入れるだけのためにも足りない」とし、<sup>(12)</sup>更に大資本家については、「一般に大資本の蓄積にあたっては、より小さな資本家に比較して固定資本の集中と単純化とがまた相当おこなわれている。大資本家は自分のために労働諸用具の一種の組織化を導入する」と規定するのである。<sup>(13)</sup>

そしてマルクスの叙述は、このあと第二段落に入り、この大資本の支配という歴史的状況が、シュルツやペクールやビュレ等の言葉により提示される。しかしこうしたマルクスによる大資本の成立・発展の叙述・構成は、上に示した如く、資本家そのものの競争・蓄積傾向として語られるのであって、これは国民経済学的カテゴリーを現実的・歴史的に展開することにより、国民経済学的世界の自己破産への道筋をまさにスミス等国民経済学者自身に語らせるという質のものだと言えることができる。

それ故、第二段落においてマルクスが、シュルツやペクールやビュレ等からの数多くの抜粋を行

注(11) *ibid.*, S. 488, p. 48.

(12) *ibid.*, S. 491, p. 53.

(13) *ibid.*, S. 491, p. 53.

なうのは、こうした国民経済学的世界の現実化した破産を具体的に提示することが意図されていた。ただこの際注意すべきことは、「資本の利潤」項でこの部分に対応する「労賃」項の抜粋部分の意味である。これはシュルツやペクルールからの引用において顕著に見られることだが、「資本の利潤」項と「労賃」項とでなされる引用ページ数が非常に近くしかも前者から後者へと続くケースが多いということ、更にその内容についても、それらを二つの項に振り分ける必要があまりないと思われること、などから判断して、これらを区別して読むことは余り意味がないのではなからうか。すでに指摘したように、マルクスは、先の中間総括の時点で、「労賃」項での独自の展開は放棄していたと思われるし、草稿ページ〈8〉から始まる「労賃」項の最初に現われるシュルツからの引用文は、「資本の利潤」項でのシュルツからの引用文の継続と考える方が妥当だろう。そしてシュルツばかりでなく、ペクルールやビュレ等からの引用についても、同様のことが言いうる。すなわち「労賃」と「資本の利潤」の両項は、少なくとも「資本の利潤」項のこの第二段落以後は一つのものとして展開され、そこにおいては、巨大化した資本とその下での労働者の悲惨な状態——人類の大部分が抽象的な労働へと還元されている状態——が、国民経済学的関係として、私有財産の関係として語られているのである。

そして更にマルクスは、これら二項を締めくくるに当って、この国民経済学的関係をまさにスミスからの引用によって——シュルツ、ペクルール、ビュレ等からの数多くの引用の後に、再度スミスからの引用を行なうということはまさに象徴的と言うべきだろう——、あたかも生産手段の所有・非所有という関係によりこれらを結論づけるかのように、次の抜粋を提示するのである。すなわち、「こうして事柄の性質上、資本の蓄積は必然的に分業に先だつものであるから、労働は、資本がしだいに集約されてゆくのに比例して、それだけますます細分化されてゆくのである。労働が細分化されればされるほど、同数の人々が加工できる材料の量はそれだけ増加する。各労働者の作業がしだいに大きな度合で単純化されてゆくにつれて、一群の新しい機材が発明され、この作業を容易にし短縮する。したがって、分業がより広汎に拡大されれば、同数の労働者にたえず仕事があたえられるためには、従来と同量の生活資料の準備と、従来はまだ未発達の状態において必要であったよりはるかに多くの材料、諸用具、手工用具の準備が、前もって集積されていなければならない。」<sup>(14)</sup> (強調、引用者)

こうしてマルクスは、資本と賃労働との現実に存在する対立を、ほかならぬスミスの言葉により規定してみせたが、このことは先に述べた如く、まさにスミスに代ってかれの体系、あるいは国民経済学そのものを、反省的に捉えなおす作業としての意味をもつものであった。更にまたこのことは、論理的飛躍を怖れずに言うなら、マルクス自身のそれ以前の現実認識への反省をも意味していたと言うべきであろう。それ以前のマルクスの内部での資本家とプロレタリアートの無媒介的・観

注(14) *ibid.*, SS. 495—496, p. 59.

念的な対立が、スミスの体系あるいは国民経済学的関係を通じてせられることにより、マルクス自身にとって反省的に捉えなおされることを意味していたと言えるだろう。

さてマルクスは「資本の利潤」項(「労賃」項を含む)において、上述のごとく、スミスの初期未開社会からの展開に際しての「資材の蓄積」という事態の無媒介的導入を批判し、これを歴史的に規定してみせたが、この作業は「地代」項についても果されなければならない。それ故マルクスは、「資本の利潤」項の結論部をスミスからの引用により示した後、それにつづけて、この「資本の利潤」項での展開を「地代」項へと拡大するため、ここにおいて再度シュルツからの長い引用を行なうのである。すなわち、「生産諸力のいっそう広汎な結合……それは工業および商業においては、いっそう大規模な企業のために、より多数の、より多様な人間諸力および自然諸力を結合することによってなされる。またすでに、生産の主要諸部門相互間の密接な結合があちこちにみられる。そこで大工場主たちは、彼らの工業に必要な原料の少なくとも一部分でも第三者から買いいれないで済むように、同時に大土地の所有者となろうと努めるであろう。さもなければ彼らは……自分の工業的企業を商業と結合しようとするであろう。……これによって資本家たちにとっては、その節約した分をさまざまな仕方で、しかもまた同時に、農業的・工業的および商業的生産に活用することが可能となり、それによって彼らの利益はいっそう同時的に多面的なものになり、農業・工業および商業の利害の間の諸対立は緩和され融合される。だが、資本をもっとも多様な仕方で収益あるものとする可能性がこのように容易になったこと自体が、有産階級と無産階級とのあいだの対立を激化するにちがいない。」<sup>(15)</sup>

このシュルツからの引用によって「資本の利潤」項の最終ページ(草稿ページ<16>)は終わっているといえるが、ここで提起された土地所有と資本との結合の問題は、草稿ページ<17>の「地代」項へと継続されていく。そこにおいてマルクスは次のように言う。「したがって、最後の結果は資本家と地主とのあいだの区別の解消である。こうして全体としては、もはや住民の二つの階級、労働者と資本家階級とだけが存在することになる。」<sup>(16)</sup>

このマルクスの言葉は、内容的には、いわば結論的な意味をもっていると言えるが、少なくとも「地代」項でのそれ以前の展開からはこうした結論を導き出すことは、困難である。すなわち、これに先立つ「地代」項での展開は、先の草稿ページ<7>での中間総括の後、地主階級の利害が借地農・農僕・製造業労働者および資本家の利害と対立関係にあることが抜き書き的に指摘され、それに続けて「資本の利潤」項での資本家間の競争の叙述を受けるように、大土地所有と小土地所有との競争が、草稿ページ<11>の終りから<12>にかけてとそして同じく<16>との二ヶ所に分けて述べられているが、これらの記述からは、先の結論へと導くことは論理的に不可能である。しかし、

注(15) *ibid.*, SS. 496-497, pp. 60-61.

(16) *ibid.*, S. 505, p. 75

「地代」項での記述が草稿ページ〈13〉から〈15〉の間での空白——というより他の二項が「地代」項の記述されるべき箇所を占領しているのだが——にもかかわらず、その前後で完全に継続していることから見ても、「資本の利潤」項でのシュルツからの引用による移行部分は、マルクスが「地代」項のこの部分を書く以前に既に出来上っていたと言える。だからマルクスは、この「地代」項での展開によって、土地所有の側から土地所有と資本との結合を導き出そうと試みたのだと考えられるが、そこから導き出されたものは、大土地所有と小土地所有との競争が、「大土地所有の再度の蓄積」をもたらすということで終わってしまい、その展開は結局挫折したと見るのが妥当だろう。そのためマルクスは、「この競争は、さらにつぎのような結果をもたらす。すなわち……資本家が同時に地主になるということである」<sup>(17)</sup>（強調、引用者）との強引とも思える飛躍を行ない、シュルツからの移行部分の展開に追いつき、しかる後に、先のいわば早過ぎた結論を得たのだった。しかしマルクスはこうした自己の展開の不十分さを補なう作業を、この結論の後で改めて展開しなおす。

スミスにおいては、その地代規定は未だフィジオクラートの的であり、所得の三源泉の三項の中でも他の二項に対し論理次元を異にするところで成立しているにもかかわらず、スミスはこれを、彼の時代の要請としてあったのだが、国民経済学的関係の中に挿入していた。そのため前節でも述べた如く、マルクスはこのスミスの地代規定を、国民経済学的関係として定立しなおし、それにより国民経済学的関係の完成された姿を対自化する必要があった。しかしマルクスにとっても、当初スミスによる地代の前国民経済学的規定を明確には把握しえていなかったという限界があり、その展開は不十分のまま残されていた。このことは、スミスの所得の三源泉の把握の中に構成されている二つの自然を、国民経済学的関係においてのみ捉えようとしたマルクスの失敗を意味しているし、あるいは「資本の利潤」項での国民経済学的関係の「地代」項への強引とも思える導入にも現われていた。

だからマルクスは、新しい次元で再度、先に挙げた早過ぎた結論への論証を行なうのである。すなわちマルクスは、それまで市民社会内部での土地所有の問題点を、フィジオクラートのロマン主義（土地所有者の利害と社会の利害の一致）との関連において述べてきたことを捉えなおし、現実の土地所有の問題点を私的所有の関係の中に据えようとする。そのため大枠としては、草稿ページ〈17〉の第三パラグラフから始まる(1)において、先に草稿ページ〈8～11〉にかけて示された地主の利害と社会の利害の一致についての記述が、更に同じく草稿ページ〈19〉の後段から始まる(2)において、草稿ページ〈11〉の後段から〈16〉にかけての大土地所有と小土地所有の競争の記述が、それぞれ書き改められたと言えよう。

そして(1)からは、そもそも封建的土地所有そのものが、その本質からして、「掛値売りされた土地」であり、私有財産の基礎として位置づけられ、その展開の結果、そこにまとわりついていたロ

注(17) *ibid.*, S. 505, p. 75.

マン主義的外被が剥ぎとられざるをえないことが示される。すなわち、「土地所有、つまり私有財産の根源が、私有財産の運動のなかに完全にひきづりこまれて商品となること、所有者の支配が私有財産の、資本の純粹な支配として、すべての政治的色あいを脱して現われること、有産者と労働者とのあいだの関係が、搾取者と被搾取者の国民経済学的関係に還元されること<sup>(18)</sup>」等々が、特殊土地所有の論理からではなく、私有財産の論理により示される。更に(2)においては、このフィジokrat的ロマン主義の外被を剥がれ、国民経済学的関係に還元された土地所有者が、圧倒的多数の工業人口を産み出し、そのことによって、一方では大土地所有の敵対者をつくり出し、他方では土地所有そのものに産業的性格をおびさせることになることが、イギリスを例にとりながら示される<sup>(19)</sup>。

さて、マルクスが土地所有を国民経済学的関係において捉えなおしたところで、先に「資本の利潤」項から導き出された土地所有と資本との結合という結論に内容が与えられることになる。そしてまた、このことにより「土地の私有」と「資材の蓄積」というスミスにあっては、無媒介的に並列されていた両項が、国民経済学的関係という歴史的課題として語られることが可能になったと言えるし、それ故に、草稿ページ〈7〉の中間総括で提起された問題(1)における新しい歴史構成への道が、マルクスにより一応の成果をもって果されたと言わなければならない。「最後に、最低限に切り下げられた労賃は、新しい競争に耐えるために、なおいっそう切り下げられる。こうしてそれは必然的に革命へとむかうのである。<sup>(20)</sup>」第一草稿前半部への結論とも言えるこのマルクスの言葉の中に、かれの新しい社会・歴史構成への自信を読みとるのは、いきすぎだろうか。

4

マルクスは、第一草稿の前半部の「労賃」「資本の利潤」「地代」についての平行的記述において、スミスによる現実社会の整合的・調和的な叙述・構成を、具体的にはスミスの体系内でのこれら三項の無媒介的統一を明らかにすることにより、批判してきた。そしてこうした観点から第一草稿前半をまとめてみれば、草稿ページ〈7〉までは、スミスの調和的世界におけるその否定項、すなわち賃労働の定立の過程であり、それ以後は、この否定項の上でのマルクスによるスミスの世界的否定的構成の過程であった。しかもマルクスは、このスミスの世界的否定的構成をまさにスミスの

注(18) *ibid.*, S. 506, pp. 77-78.

(19) マルクスにとって封建的土地所有から近代的土地所有への移行の問題は、第一草稿以後もつづけられる。そして第二草稿では借地農の論理をより明確に打ち出し、弁証法的トリケーズをもって地主の資本家への転化が語られる。また第三草稿「私有財産と労働」においても、国民経済学的のシニズムの完成として同じテーマが語られている。そしてそれらの叙述は、第一草稿のここでの議論より細かく展開されているが、本質的なところでは、大きな変化はないように思う。

(20) *ibid.*, SS. 509-510, p. 82.

言葉を用いて、私有財産の関係として描いてみせた。だからマルクスは、草稿ページ〈22〉のいわゆる「疎外された労働」の冒頭部において、以下のように自負するのである。「われわれは国民経済学の諸前提から出発した。われわれは国民経済学の諸用語や諸法則を受け入れてきた。われわれは、私有財産を、労働と資本と土地との分離を、同様に労賃と資本利潤と地代との分離を、また分業、競争、交換価値の概念などを、かりに認めたのであった。国民経済学そのものから、それに特有の言葉をもって、労働者が商品へ、しかももっとも惨めな商品へ転落すること、労働者の窮乏が彼の生産の強さと大きさとに反比例すること、競争の必然的結果は、少数の手中への資本の蓄積であり、したがっていっそうおそろべき独占の再現であること、最後に資本家と地主との区別が、耕作農民とマニュファクチュア労働者との区別と同様に消滅して、全社会が有産者と無産の労働者という兩階級へ分裂せざるをえない<sup>(21)</sup>ということを示してきたのである。」

そしてここからマルクスは、私有財産を単に事実として描写するのではなく、これを概念的に把握することを意図して、いわゆる四つの疎外についての叙述へと入っていく。かれの疎外論の内容についての詳細な検討は、稿を改めて述べねばならないとしても、最低限度ここにおいても、かれの疎外論がなにを課題として構想されたかということだけでも、考えていかなければならない。そして粗雑な目から見ても、これら労働生産物からの疎外、労働からの疎外、類からの疎外、人間からの疎外というこの四つの疎外によってマルクスが描き出そうとしたものは、たとえそれが実体としては三項の平行的記述で示されたものと同一だと言うことができるとしても、それが切りひらく世界はいっそう大きいと言わねばならない。

マルクスが、第一草稿前半で三項に分けての記述方法をとったのは、「地代」項と「資本の利潤」項とを賃労働・営利労働という概念をもって否定的に媒介し、それによってこれら二項がスミス体系の中で与えられていた相対的独自性を、私有財産の関係へと解消することが意図されていたということはすでに述べてきたが、この際ほかならぬこの「労賃」項での記述は他の二項に対して、その性格を異にするものとして用意されていた。というのは、スミスの「地代」及び「資本の利潤」という二項を私有財産の関係へと解消するという意味からいっても、この「労賃」項は、その当初から私有財産の関係のもとに用意されていなければならないからである。そして事実、「労賃」項でのマルクスの記述は、たとえ数多くの『国富論』からの引用により構成されているとしても、それがマルクス自身の手による、スミスとは区別された方法意識のもとでの構成であるということは容易に見てとれるだろう。すなわちマルクスは、スミスの初期末開社会を想定しての労働の規定ではなく、まさに労賃に対する国民経済学的関係としてのかれの規定を抽出し、それを再構成したと言える。マルクスによるスミス批判の中でも、こうしたスミスにおける国民経済学的関係と自然的秩序との調和的統一に対する批判は、そのままマルクス自身の思想的構え、すなわち方法意識に関

注(21) *ibid.*, S. 510, p. 84.



わる問題であり、もっとも重要な意味をもつものと言わねばならない。だからこの批判を進めるためにもマルクスは、スミスの中の国民経済学的関係・私有財産の関係を注意深く抽出し、その展開によってスミスの調和的世界を否定的に構成したのである。「疎外された労働」にいたるまでのマルクスの記述は、それ故、スミスが所得の三源泉的把握によって現実的なるもの(私有財産の關係)と理念的なるもの(類的關係としての市民社会)とを整合的に叙述していたことを捉え、その所得の三源泉的把握そのものを批判することによって、現実的なるものと理念的なるものとの不整合性を導き出すものとしてあった。

これに対して、ここに新たに提起された「疎外された労働」項での問題は、それまでのスミスの調和的世界に対する否定的構成、すなわち古典派的世界の反省的構成という枠を更に一步押し進めて、現実的なるものとしての現実社会の否定的構成という課題を担っていると言えるだろう。それ故、それ以前の叙述の中で、「労賃」項が他の二項に比べて消極的にしか展開されていなかったのに対し、ここでは「疎外された労働」という新しい概念をまとって積極的に展開されることになる。

すなわちマルクスが、スミスにおける現実的なるものと理念的なるもの、すなわち、私有財産の關係と類的關係としての市民社会との不整合を批判したということは、マルクスに対して、スミスとは異なる論理次元において、これら両者を総合的に把握し、それによって現実社会を再構成するという新しい課題、言い換えれば、新しい方法意識の確立を提起せざるをえなかった。そしてその際、類的關係としての市民社会ということについていうなら、当時のマルクスがフョイエルバッハをして「社会主義に対して哲学的基礎を与えた」と評しているところから推測できるように、マルクスは、フョイエルバッハの諸著作から導き出した類概念を、こうしたスミスの市民社会理念を通過させることにより現実的世界に対して積極的意味をもちうる概念へと発展させていたし、また他方、私有財産の關係についての叙述についても、先の「疎外された労働」冒頭でのマルクスの自負によっても確認された如く、かれはスミスからの資本蓄積なる概念を、エンゲルスの影響も手伝って、シュルツやベクルやビュレ等からの抜粋により展開し、そこで新しい歴史構成への方向を確立していた。それ故マルクスは、ここに新しく「疎外された労働」なる概念を提起し、これら両者を総合的に把握しかつ叙述・構成することを意図したということができよう。そしてマルクスがこの作業を、営利労働あるいは賃労働という概念によってではなく、「疎外された労働」という概念により行なったということは、かれの構想していた現実社会への全体的な認識更には構成というものが、単に古典派的世界の中での、私有財産の關係と類的關係としての市民社会との整合・不整合という次元を超えて、これら総体を反省的に捉えなおす質をもっていたと理解することができる。そしてこれは、青年ヘーゲル学派として出発したマルクスが、スミス等国民経済学へと関わる以前に持っていたブルジョアジーとプロレタリアートの対立に対する無媒介的な認識を、反省的に捉えなおしたものと考える必要がある。マルクスが、スミス等国民経済学をかれの内部でかれらに代って



反省するという過程は、同時にマルクス自身の青年ヘーゲル学派としての自己の反省過程を意味していたのである。

更にこのことは、先に触れた草稿ページ〈7〉の中間総括で提起された問題(2)——労賃をひき上げて、それにより労働者階級の状態を改善しようとするか、さもなければ労賃の平等を(ブルードンのように)社会革命の目的とみなすような社会改革家たちは、細かく立ちいってみれば、どのような誤りをおかしているか——との関連において、この問への解答を用意する基盤だとも言える。ブルードンの如くにスミスの類的関係としての市民社会に依拠して、リカード価値論の空想的再構成を行ない、結果的には賃労働と資本の対立を古典派的秩序の中において止揚できるとする立場<sup>(22)</sup>に対して、上述の如きマルクスの疎外論における立場は、これら資本と賃労働総体を止揚する、すなわち古典派的世界そのものを一極とし、それと弁証し合う他の極を想定する立場だと言えるからである。そして、このマルクスの新しい立場すなわちかれの方法意識は、ブルードン批判等を通して、経済学批判としての現実構成の核、すなわち価値論批判へと進む道を切り拓いたと言わねばならない。

以上私は、マルクスの思想的構え、言い換えればかれの方法意識が、スミス批判を通して「疎外された労働」として結実するまでの過程を見てきた。これは広くはマルクス経済学批判への入口を、スミスとの関係において確認することであり、狭くは、この経済学批判のそれ以後の展開を追求していく上で、疎外論の射程範囲を限定する作業でもあった。もっともマルクスの疎外論が、この意味で完全なものだとは言えないにしても、少なくとも疎外論への内的検証を進めるためにも、これの有効範囲を確認せず、ただ疎外論として批判する暴挙を自分自身に対していましめるためにも、こうした作業は私にとって必要であった。

(金沢大学法文学部経済学科助手)

注(22) 拙稿「マルクスにとってブルードン批判が意味したもの」(『金沢大学法文学部論集』経済篇 21)。